

スタンダード研究会会報

2016 No. 26

2016年5月28日

目次

研究発表要旨

- エッセル版『パルムの僧院』の異文
高木 信宏 2
- 日韓共同制作ドラマ『赤と黒』論評（補追）
— 二十一世紀の「受容者」が「メロドラマ」に求めるもの —
寺西 暢子 4
- スタール夫人の生涯とスタンダール小説
— 『パルムの僧院』を中心に
下川 茂 7

書評

- Stendhal, *De l'amour*, Présentation, notes, annexes, chronologie
et bibliographie par Xavier Bourdenet, GF Flammarion, 2014
杉本 圭子 12

コロック報告

- 『スタンダールは動く』« Stendhal en mouvement », 2015 年
12 月 10 日 11 日 & 『スタンダール：幸福とメランコリー』
« Stendhal : bonheur et mélancolie », 2016 年 3 月 18 日 19 日
上杉 誠 14

会員活動報告 19

編集後記 20

【研究発表要旨】

第 64 回 (2015 年 5 月 30 日 明治学院大学白金キャンパス)

エッツェル版『パルムの僧院』の異文

高木 信宏

ロマン・コロンが校訂したエッツェル版『パルムの僧院』(1845 年)の本文は、少数ながら興味深い異文を含むものの、管見するところその由来についてはまだ検討の余地が残されている。本発表では、関連する資料の再検証を通じてコロンによる改訂の方針や方法を把握するとともに、初版の本文ならびに各手沢本の訂正とエッツェル版の異文との比較検討をおこない、スタンダーが後者を案出した時期やそれらを書き込んだ媒体について新たな仮説の提出を試みた。

まず考察に際して留意しなければならないのは、エッツェル版『赤と黒』(1846 年)との校訂方法の相違である。同版の本文には重大な異文が見られるが、別稿で考証したように、それらは作家の意図を反映する目的で採録されたものではなく、小説第 2 版(1831 年)の清刷ないしは差し替え訂正が施されていない刊本をコロンが底本に使用したため偶発的に生じたヴァリエントであった。

他方、エッツェル版『パルムの僧院』の異文について従来の研究では、スタンダーの 1840 年 5 月 20 日付コロン宛書簡を根拠にし、大半が作家自身によって従弟に示された訂正であるという推測が支持されてきた。しかしながら、『僧院』の手沢本(シヤペール本, ロワイエ本, ランゲー=アザール本)に残された数多の修正を検分しえたコロンが、1840 年春の訂正のみを特別扱いにしたと考えるには根拠が充分ではない。しかも先行研究の解釈に修正をもたらさうる一次資料がジャック・ウベールによって 1996 年に公刊された。それは 1846 年 1 月 31 日付のバルザック宛書簡であり、コロンは書中で異文の由来についてこう明言しているのだ——「私は施すべき変更が記された草稿を手中にし、草案を丹念に吟味しましたが、長らく躊躇したあげく、改善するつもりでかえって損なってしまうのを懼れて、それらを用いないことに決めました。したがって『パルムの僧院』はもとのまま新たに刷られたのです、ただし他界する 25 日前(1842 年 2 月 26 日)にベールが第 1 巻の冒頭 10 頁ほどに施した軽微な修正を除いて」。

なぜコロンは、作家が他界するひと月前の「軽微な修正」だけをエッツェル版のテ

クストに採り入れたのか。この問いに答えるためには、近年えられた知見にもとづき、『僧院』初版刊行後の修正過程を再検証する必要がある。1839年4月11日、スタンダールはパリ街頭でバルザックと遭遇し、改訂版のために助言を惜しまない文豪から修正に協力する約束をとりつける。同月半ばには初刷り 1,200 部は完売し、改訂の計画はにわかに現実味を帯びる。だが共同修正の話は、スタンダールが6月下旬にチヴィタヴェッキアに帰任し、自然消滅したようだ。彼はイタリアで白紙を挟み込んだ『僧院』（シャペール本）を装幀させ、同年11月中旬にテキストの手直しに着手する。とはいえ、第2版の出版計画が具体化したわけではなく、作家は思いつくままテキストに手を入れている。翌1840年6月の本文の訂正は改訂版ではなく再版に備えたものであり、企図されたのは差し替え刷りによる初版本の修正であった。

こうした修正の方針を転換させたのは、『ルヴュ・パリジエンヌ』誌に掲載されたバルザックの「ベール氏論」である。スタンダールは同年10月15日に評論を一読するやいなや、第2版の出版に向けて新たな自家用本（ロワイエ本）をつくり、バルザックの助言を参考にしつつ本文の修正を開始する。装幀の際に冒頭部54頁を削除させるなど、シャペール本を用いたそれまでの訂正とは一線を画す内容となっている。

しかし新方針は安定しない。スタンダールは1841年2月初旬に小説の冒頭部を元の構成に戻す決心をするが、翌月、脳梗塞の発作に倒れ、テキストの修正作業を続けることがきわめて困難になる。そのため彼は4月初旬にバルザックに改めて修正のための具体的な助言を請おうと手紙を書き、白紙を綴じ込んだ『僧院』を託そうとするのである。だが、後者からの返信はなかった。望みを絶たれた作家は、療養のための賜暇を利用して『僧院』の修正にこんどは独力で再着手するべく、手沢本をみな携えてパリへ戻る。1842年1月、彼はシャペール本を用いて本文の訂正を再開するも、もはやその体調は仕事の継続を許さなかった。

以上の経緯を踏まえるならば、コロンがエッツェル版に採録したヴァリエーションは修正過程の最後期に位置するといえるが、このことは初版の本文、手沢本に書き込まれた修正、エッツェル版の異文の比較・考察を通じても確認できる。というのも、後者の大半にとってプロトタイプと呼びうる修正の数々がシャペール本に見出されるだけでなく、そのほとんどに1842年の日付が打たれているからである。つまりスタンダールは1842年に入って小説冒頭部の修正に着手し、1842年2月26日に冒頭10頁ほどの訂正案を固めたと考えられよう。浄書に用いられた媒体については、彼がバルザックのために用意し、コロンに預けてあった『僧院』の特装本を流用した

可能性が高い。

おそらくコロンにはそのような文脈が見えていた。彼は単に時期的に最後だからという理由から、2月26日付の訂正をエッツェル版に採り入れたのではあるまい。スタンダールの死後、コロンは遺された手沢本をつぶさに吟味したからこそ、これらのヴァリエーションがもつ特別な意義、すなわちバルザックの助言を離れた改訂作業の再出発という意義が良く分かったのであろう。彼はそうした従兄の意志を惜しみ、エッツェル版の校訂に反映させようと考え、2月26日付の異文だけを採録したのだと思われる。

第65回（2015年12月19日 キャンパスプラザ京都）

日韓共同制作ドラマ『赤と黒』論評（補追） —二十一世紀の「受容者」が「メロドラマ」に求めるもの—

寺西 暢子

第62回研究会（2014年5月24日）の発表においては、ジュリアン・ソレルの本質を「un plébéien révolté（平民の社会的反逆児）」と捉えた場合、日韓共同制作ドラマ『赤と黒』のヒロイン、ムン・ジェインが（主人公シム・ゴヌクより）スタンダールの小説の主人公に近い登場人物として描かれていることを、翻訳された科白と映像テキストの分析を通して指摘した。しかるに、一見、現代的で野心家のこのヒロインに対して、韓国、日本を問わず、「受容者」（必ずしも、「韓流ファン」とは限らないが、主に、女性）は、「拒絶反応」に近い反応を示した¹。例えば、ある「韓流ファン」のブログにおいて、ブログの筆者は、ムン・ジェインが「普通以上の境遇」にあると判断している。確かに、彼女は、美貌に恵まれ、高学歴、「アートコンサルタント」と片仮名書きで表される職業についている。しかし、その一方、母子家庭の子女でもあり、また、「契約社員」でしかないと、常に、日々の生活費の問題と直

¹ ソーシャルメディアが発達した今日においては、特権的な立場でなくとも、即ち、テレビ局や新聞社、出版社等の職員でなくとも、自分以外の「受容者」の反応を知ることは難しくなくなった。

² 高野悦子・山登義明『冬のソナタから考える』、岩波ブックレット、2004。尚、口頭発表の時点では、我々は、この著作の入手が間に合わず、下記の上野輝将の論文中の引用、言及を参照した。今回、要旨を纏めるに際しては、高野・山登の著作を丁寧に通読した。この要旨全体において、

面している。このようなジェインの境遇を、なぜ、「普通以上」と形容するのか？ヒロインに対する「反撥」をも窺わせる、こうした客観性を欠いた反応が生まれるのは、どのような理由からなのだろうか？

その疑問に対する返答を模索するため、我々は、このドラマを制作したNHKが、番組放映時、ドラマ『赤と黒』を「新・韓流ドラマ」として、宣伝したことに着目した。「新しい韓流ドラマ」を制作したと言うことは、制作担当者の念頭には、当然ながら、「これまでの韓流ドラマ」＝「旧・韓流ドラマ」という概念が存在していたはずである。そして、その雛形とも言える具体的な作品は、やはり、「韓流ブーム」の契機となった『冬のソナタ』であろう。

『冬のソナタ』は一世を風靡した作品だけに、膨大な量の文章が書かれている。その中で、このドラマが総合テレビで放映されるに際し、企画された特集番組を担当したNHKの元プロデューサー山登義明、岩波ホール総支配人として知られた高野悦子²、また、神戸女学院大学教員有志「ジェンダー研究会」で、この作品について、研究報告を行った上野輝将³、更には、NHKにファンレターを寄せた『冬のソナタ』ファンの一女性⁴もまた、この映像作品を、躊躇うことなく、「メロドラマ」と呼んでいる。

フランス文学史上において、「メロドラマ《le mélodrame》」と言えば、フランス革命を契機に、民衆教化のために確立された演劇の一ジャンルである。ロマン主義演劇の作家達は（メロドラマに多くを負っていたにも拘わらず）、自分達の作品を特権化したため、1830年代以降、この大衆向けの演劇ジャンルには侮蔑的な意味合いが含まれるようになる。その結果として、「メロドラマ」の作者達は、自らの作品を呼ぶ際、この呼称を避けるようになったため、今日、どのような作品を「メロドラマ」に分類するか、は、研究者によって意見が分かれる。しかしながら、その中から、我々は、先ず、（主に、Brooks に依拠して）古典的なメロドラマの原型の図式において、その結末が、単なる「幸福な結末《le happy end》」ではなく、徳高い汚れなき主人公の「美德」が再認された上で、「社会の秩序」が回復される点に注目した。また、映像作品との関連から考えるなら、1830年代から世紀を経て、無声映画に引き継が

² 高野悦子・山登義明『冬のソナタから考える』、岩波ブックレット、2004。尚、口頭発表の時点では、我々は、この著作の入手が間に合わず、下記の上野輝将の論文中の引用、言及を参照した。今回、要旨を纏めるに際しては、高野・山登の著作を丁寧に通読した。この要旨全体において、発表当日には不十分と思われた点について、加筆訂正している。ただし、脚注は最低限に留めた。

³ 上野輝将「『冬のソナタ』論—その「保守性」と「革新性」をめぐって—」（神戸女学院大学教員有志「ジェンダー研究会」における報告、2006年10月25日。）『冬のソナタ』に関連する文献については、この上野の論文に負うところが多い。この場を借りて、御礼申し上げたい。

⁴ 高野・山登、前掲書、p.8。

れる過程で、様々な社会的な変化を反映しながらも、フランス革命後、科白劇が上演可能な、限られた数の劇場の特権が廃止される以前、そうであったように、その本質が「見せる物」「見世物」であったことも強調しておきたい。

他方、日本語の「メロドラマ」という言葉は、『広辞苑』や『国語大辞典』（小学館）に依れば、20世紀初頭に、米国を経由して、日本に流入している。今回の発表では、『国語大辞典』に用例として引かれていた中村春雨（吉蔵）『欧米印象記』（1910年）、（大阪朝日の記者であった）原田棟一郎『紐育』（1914年）、大杉栄「新しき世界のための新しき芸術」（『早稲田文学』（1916年））、そして、大岡昇平『俘虜記』（1949年）の原テキストを精査して、「メロドラマ」という日本語の意味が、どのような内容の作品を指すのか、検討を試みた。その結果として、本格的な文学作品、芸術作品より軽い大衆向けのジャンルとして規定されていることは分かるが、その具体的な内容については、19世紀フランスで確立した古典的メロドラマのように「見世物」的な側面を持つ演劇の場合もあれば、今日のスパイ映画、あるいは、ミステリー小説に通じるような、（ジャンルを問わず）スリルとサスペンスに富んだ作品なども含まれているようである。ただし、今回の調査では、特に、（辞書の定義にあるような）「恋愛」を中心とした作品を指すとは考えられなかった。いつ頃から、なぜ、そのような定義がなされるようになったのかについては、今後の課題としたい⁵。

なぜなら、『冬のソナタ』に代表される「旧・韓流ドラマ」の特性は、（日本語においても）侮蔑的な意味合いを持つ「メロドラマ」という言葉ではなく、本来、「純愛物」という、より肯定的な概念で定義されるべきであったと、我々は考えるからである。また、一口に「韓流ドラマ」と言っても、実際は、様々な映像作品が存在するのも事実である。ところが、社会的現象や流行に敏感なジャーナリズムの世界の住人であるNHKの企画担当者は、既存の「韓流ドラマ」を『冬のソナタ』＝“メロドラマ”＝「女性向けの恋愛中心の作品」という図式に還元してしまい、その（女性が好むと考えられやすい）「通俗恋愛劇」とは性質を異にした、社会派ミステリーのようなドラマを作ろうと考えたのであろう。だが、そもそも、既に、我々が、前回の発表で指摘したように、現場の制作担当責任者であったイ・ヒョンミン氏の本領は、（『冬のソナタ』同様）ドラマの中に、通奏低音のように常に内在している「純愛の物語」においてこそ、発揮されるのであり、また、その人生哲学は、社会的強者を、映像作品を通して、痛烈に批判しようと言った、ある種の、英雄主義とは、程遠い

⁵ 今回、その点が明らかにならなかった原因として、『国語大辞典』（小学館）の用例が20世紀半ばまでのテキストに限られていたことが考えられる。

ところにある⁶。そのような不協和音に加えて、NHKのドラマ『赤と黒』の企画担当者は、ドラマの主な視聴層である（「専業」、「兼業」を問わず）「主婦層」もまた、（仮に経済的に恵まれているとしても）「社会的弱者」であると言う事実を忘れていたのではないか？大杉栄は、大衆向けの「メロドラマ」をアルコールのような中毒を伴う危険なものとして批判してはいるが、その一方で、民衆向けの演劇においては、「最後に善が勝つというみんなの心の奥底に持っている衷心からの確信」が証明される必要があると述べている。19世紀フランスの古典的メロドラマがそうであったように、「美德」が再認された上で、「社会的な秩序」が回復されるドラマこそ、経済的に自立していない主婦層が、安心して視聴出来るドラマであり、日常生活の憂さを思い起こさせる現実的過ぎるヒロインも、また、「社会的強者」のために「秩序」が回復されるだけの悲劇的な結末も、彼女達が抱える明日への不安への配慮を欠いた、（大杉栄の言葉を借りれば）「選ばれた人々⁷」の勇み足ではなかったのか、と、我々は考えている。

スタール夫人の生涯とスタンダード小説 — 『パルムの僧院』を中心に

下川 茂

スタンダードがスタール夫人の著作から多大な恩恵を受けたことについては既に先行研究があるが、これまで、夫人の生涯、その人となりとスタンダード小説との関係が取り上げられたことはない。しかし、バルザック宛書簡草稿で、スタンダードは『パルムの僧院』の大公エルネスト4世のモデルはナポレオンだと明言している。ナポレオンと対立したスタール夫人の性格や行動が、大公と対立し、最後には毒殺するに至るサンセヴェリーナ公爵夫人ジーナに移し入れられている可能性はないだ

⁶ その点では、イ・ヒョンミン氏は、好評を博した数々の歴史ドラマの監督、イ・ビョンフン氏とは対照的である。ただし、イ・ビョンフン氏は、自らの作品が、また、「受容者」にとって、「楽しみ」であり、「娯楽作品」であることも、決して、忘れない。

⁷ 大杉の芸術論は、勿論、彼の政治的信条を裏打ちするものであるが、とは言え、大衆芸術論として読んだ場合、看過できない興味深い論点を含んでいる。大杉の言う「選ばれた人々」とは、所謂、「文学者」や「芸術家」を指している。我々は、商業ベースで仕事をするマスメディアの人々が、その芸術的信念や人生哲学を、作品を通して、追求することが悪いとは思わない。しかし、その場合でも、「受容者」が置かれている社会的立場への配慮は必要であろう。

ろうか。

『パルムの僧院』 (*La Chartreuse de Parme*, in Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, III, Pléiade, 2014, p.406、以下頁数のみ記す) にはジーナがアルミダに譬えられている箇所があるが、ナポレオンは『セント・ヘレナ日記』でスタール夫人をアルミダとクロランドに譬えている (*Le Comte de Las Cases, Le Mémorial de Sainte-Hélène, texte établi et commenté par Gérard Walter*, II, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1956, p. 204-205)。ルノーはアルミダの魔法から逃れ、タンクレードはクロランドを殺すが、スタール夫人はナポレオンとの長い対立の後、コペを脱出し、ロシア、スウェーデン、イギリスと移動して、反ナポレオン同盟を支援し、ナポレオンの没落に大きな役割を果たす。大公とジーナの戦いがジーナの勝利で終わるように、ナポレオンとスタール夫人の戦いもスタール夫人の勝利で終わる。十数年に及ぶスタール夫人とナポレオンの紆余曲折のある長い対立が、『パルムの僧院』では、ファブリスの投獄、脱獄、大公の暗殺と連続する約一年間の出来事に圧縮されている。

ナポレオン同様大公も追放を支配の手段として好むが、追放に関する文言にスタール夫人とジーナに共通するものがある。フーシェの夫人への助言と (*Madame de Staël, Dix années d'exil*, éd. Simone Balayé et Mariella Vianello Bonifacio, Fayard, 1996, p.88、以下頁数のみ記す)、ジーナが大公に要求するラヴェルシ侯爵夫人の追放命令の言葉に (366)「田舎に行く *aller à la campagne*」という同一の表現がある。また、スタール夫人にフランスからの退去を命ずるサヴァリの手紙には「この国の空気はあなたに合わない *l'air de ce pays-ci ne vous convenait point*」(201)と書かれているが、パルムを去る場合に「パルムの空気が (……) 自分の健康に全く合わない *l'air de Parme, [...], ne convenait nullement à sa santé*」(252) ことを口実にしようとジーナは考える。

エルネスト4世は自分に反抗したジーナに復讐するためにファブリスを逮捕投獄し、殺害しようとするが、スタール夫人をフランスから追放したナポレオンは彼女の息子たちにもパリに近づくことを禁止する (205)。大公のファブリス殺害計画と比べて緩やかだが、迫害が親族に及ぶという点で共通する。ファブリスが投獄された時、ジーナは自身の投獄を恐れるが (395)、スタール夫人も追放が逮捕投獄へとエスカレートすることを恐れる (208)。ファブリス毒殺の危機が迫って、ジーナはファブリスを脱獄させ、パルムから逃亡することを決心するが、スタール夫人は親友シュレーゲルが国外追放されて、逃亡を決心する (209)。友人の追放と愛する甥の殺害とでは事態の重大さは比べ物にならないが、感受性豊かなスタール夫人にとっては自らの「魂」(209)の生死に関わる問題だった。ジーナはエルネスト4世をフェランテに毒殺させるが、スタール夫人はコペからの逃避行中に、ナポレオンの死

を想像する (233) 。ジーナは想像に終わった専制君主に対するスタール夫人の殺意の実行者である。

ジーナと違って、美貌には恵まれなかったが、会話と社交の才に富み、浚刺とした才気の持ち主である点でも、スタール夫人はジーナと良く似ている。社交界の花形となることを生きがいとし、社交界を離れると退屈するという点も同じである。スタール夫人が終生パリの社交界に執着したように、ジーナもウージェーヌ公時代のミラノの社交界が忘れられず、引きこもったコモ湖畔の兄の城で退屈したジーナは、パルムの宮廷での華やかな生活を選ぶ。そして、スタール夫人が当初ナポレオンを誤解して英雄視していたように (46-48) 、ジーナも最初大公を「悪い人 méchant homme ではない」 (257) と思う。

スタール夫人は自身を「鳥 oiseau」 (157) 「鳩 pigeon」 (204) に譬えているが、ジーナもモスカによって「鳥 oiseau」 (231) に譬えられる。さらに、エルネスト5世と即興劇を演じるジーナは (524) 、サロンで親族・友人達と自作、他作の劇を演じるスタール夫人を (これについては後出の Michel Winock, *Madame de Staël*, Fayard, 2010, p.267-268 参照) 、ファブリスとパルムから逃亡するジーナは、愛人で年下の Rocca とコペから逃亡するスタール夫人を (これについても Michel Winock の同上書 p.411 以下参照) 、モスカのパルム帰還後ヴィニャーノに「彼女の宮廷 sa cour」 (597) を持つジーナは、ショーモン近くの Fossé に友人を集めて「宮廷 une cour」 (195) を作っているとサヴァリに非難されるスタール夫人を思わせる。

バルザックは『ベール氏論』で『パルムの僧院』を論じた際、スタール夫人の『コリンヌ』に言及し、コリンヌとジーナの関連を示唆したが、ジーナのモデルとしてはベルジョーズ夫人の名を挙げた。しかし、スタンダールは書簡草稿で、ベルジョーズ夫人には会ったことがないと否定し、ジーナを描く際にはコレッジョの絵画が与える印象をめざしたと書いた。なぜスタール夫人の名をあげなかったのだろうか。

スタール夫人には、容貌以外に、もう一つ世間が問題視する点があった。『赤と黒』でマチルドは夫人の容貌と身持ちの悪さを取り上げている。夫スタールの存命中に生まれた4人の子の内、夭折した長女以外の3人はいずれも愛人の子とされている。また、夫の死後再婚した Rocca は22歳年下で、二人の間の息子 Louis-Alphonse 誕生の時点で (1812年) 、彼女は Rocca と結婚していなかった。マチルドが言う「不品行 l'immoralité de la conduite」 (*Le Rouge et le Noir*, in Stendhal, *Œuvres romanesques compètes*, I, Pléiade, 2005, p.668) は、これらスタール夫人の男性関係を指している。*Madame de Staël*, Fayard, 2010, p. 409 で、著者 Michel Winock は Louis-Alphonse 誕生の際に現れた次のような風刺詩を引用している。

Quelle femme étonnante et quel fécond génie !

Tout en elle produit, tout est célébrité,

Et jusqu'à son hydropisie,

Rien n'est perdu pour la prospérité.

Rocca の子の出産を秘密にしようとした夫人だが、その秘密は実際には守られず、すぐに周知の事実となった。26歳で愛人ナルボンヌの子 Auguste を産んで以来、夫人の男性関係は常に世間に知られていた。

スタンダールが最も反撥したのは、この夫人の「*tout est célébrité*」という私生活の秘密の無さだったと思われる。愛人を持つことも、その子を産むこともスタンダールにとって問題ではないが、それらが無防備に世間に曝すことは、スタンダールの情熱恋愛に不可欠の羞恥心に反する（『恋愛論』第1部第26章「羞恥心について De la pudeur」参照）。ジーナも夫以外に sigisbée (143) を何人か持っており、その点で、スタール夫人を思わせるが、彼女の多情は、近親相姦の禁忌に実現を妨げられたファブリスに対する情熱恋愛によって中和され、読者に強い印象を残さない。

スタール夫人の稀に見る奔放で大胆な男性関係は、情熱恋愛の相手として慎み深く羞恥心の強い女性を理想とするスタンダールにとって、とうてい受け入れられるものではなかった。『ローマ・ナポリ・フィレンツェ (1826)』でエンマ・ハミルトンとネルソンの恋愛を「放蕩 *libertinage*」とみなしたように、スタール夫人の男性関係も、おそらくスタンダールは「放蕩」とみなしたのではないだろうか。バルザックは『バール氏論』で『パルムの僧院』の「純潔な *chaste*」な性格を強調し、ジーナをラシーヌのフェードルと比べている。そういうバルザックにスタール夫人の名を明かすことをスタンダールが躊躇ったとしても不思議ではない。こうしてスタール夫人がジーナのモデルであることは誰にも明かされず、今日まで研究者の注意を引くこともなかった。

スタンダールとスタール夫人は出会ったことはないが、ナポレオンの勃興と没落に関わる二度の大きな歴史的イベントの際に、二人はすれ違っている。一度目はブリュメール18日（1799年11月9日）のクーデターの時で、このときスタール夫人はその日の夜にパリにコペから到着し、一方スタンダールはクーデター翌日に理工科学校受験のためにパリに到着している。二度目はナポレオン軍のロシア遠征の際で、1812年9月14日にスタンダールはナポレオン軍とともにモスクワに到着したが、スタール夫人は8月2日にモスクワに到着し、8月7日にペテルスブルグに向

かって出発している。夫人はフランス革命から帝政時代を通じて、全ヨーロッパで最も著名な女性であり、その動静は常に敵味方両方に注視され、彼女に関する情報は広く世間に流布していた。さらに、スタンダールは1802~1806年のパリでの独学時代から、夫人の著作の熱心な読者であり、ナポレオン没落後も彼女の著作に注目し続けた。特に『ナポレン伝 *Vie de Napoléon*』執筆中に出版された『フランス革命についての考察』(1818)は批判的に精読したことが分かっている。そして、夫人は、『フランス革命についての考察』でブリュメール18日のクーデターについて、『追放の10年』(1820)でブリュメールとモスクワ通過の両方について詳しく語っている。遅くとも後者が出版された1820年には、スタンダールはスタール夫人との二度のすれ違いに気付いていたのではないだろうか。そして、1796年のボナパルトのミラノ入りから始まる『パルムの僧院』執筆時に、あらためてそのことを思い出し、ナポレオンと対立したスタール夫人をジーナのモデルの一人とすることを思いついたのではないだろうか。

* 研究発表「ナポレオンと同時代の作家たち」(後平 隆)の発表要旨は次回研究会での発表内容と併せて、次号会報に掲載予定

【書評】

Stendhal, *De l'amour*, Présentation, notes, annexes, chronologie et bibliographie par Xavier Bourdenet, GF Flammarion, 2014.

杉本 圭子

1822年の初版二巻本を底本とし、一般読者向けの文庫本としてはきわめて豊かな100ページの注を施した新版である。従来参照されることの多かった、1980年刊のデル・リット監修のフォリオ版本文の誤植・脱落はことごとく修正されている。自家製本への書きこみ、1820年にミラノで最初に書かれた草稿の断片、自家製本への書きこみ、ロマン・コロン監修の1853年のミシェル・レヴィ版全集テキストとの異同については最小限にとどめられ（固有名詞や伏字の解明にかかわる部分に限定）、過去の校訂版（マルティノー校訂のクラシック・ガルニエ版、ビブリオフィル版（シャンピオン版の増補））を参照するよう促してある。

序文（Présentation）では従来重視されてきた自伝的要素（メティルドへの片思い、ヴォルテッラ事件・・・）への言及は大幅に抑えられ、『恋愛論』という複雑多岐にわたる書物をさまざまな角度から検証することに力を注いでいる。編者は、感覚主義の流れを汲むイデオログの影響、体液・気質の理論、相対主義（気候の理論、ヨーロッパの「北」と「南」、美の相対性・・・）、反キリスト教主義（愛はキリスト教とともに生まれたとするシャトーブリヤンへの反論）、「理論」と「ロマネスク」の相克、恋愛（観）と芸術（観）の混淆など、スタンダールを取り巻いていた19世紀初頭の知的風土をくまなく見渡したうえで、当時からそのまとまりのなさや不可解さを指摘されていたこの著作に、いくつかの読解の道筋を与えようとしている。

研究者のひとりとしては、編者の豊富な注釈を通じてこれまで知られていなかった情報源を知り、また同時に注釈を読みこむことによって『恋愛論』のテキストはもちろん、スタンダールおよび19世紀前半のフランスについての理解を深めることができるのを大いに喜びたい。新版では過去の版の注、およびそれを補う研究書の記述に加え、情報源とされる著作についてのより詳しい情報が加わっている。たとえば Livre II, Chapitre XLVII « De l'Espagne » の末尾の « le général *no importa* » (p.191)（「かまうものか将軍」とでも訳すべきか）という表現については、スタンダール自身が参照先を明らかにしているジョゼフ・ペッキオ著『スペインでの6ヶ月、J.O. 夫人へのジョゼフ・ペッキオ氏の手紙』の「書簡12」に、スペインには代々、戦況がど

れほど不利でもひるまない無名の猛将たちがいると書かれた一節があることが示される(注 79)。マルティノー版の注では典拠のみが記され、この呼称の意味するところがいまひとつ明確ではなかった。また Livre II, Chapitre XLIX « Une journée à Florence » で、よく知られた「控えの間の愛国心」(le patriotisme d'antichambre) という表現にからみ、「農民兵 (Soldat laboureur)」(平時には農業に従事しているが、戦争が起こると農具を武器に持ち替えて戦う農民のこと) の存在に触れている箇所では (p.199、注 101)、王政復古期に「農民兵」を主題とするパントマイムや軽喜劇、小説が多くあったことが具体的に示され、当時、大衆の間でこうした愛国者のイメージが広く流布していたことがわかる。スタンダールが『恋愛論』序文(ルイ・シモンの『スイス紀行』からの借用ではあるが)の中で、フランスにはびこる愛国主義の風潮に警鐘を鳴らしているのは、フランス革命期から続くこうした風潮に対抗してのことだったのかと、あらためて気づかされる。

『恋愛論』は記述が散漫で、反復の多いテキストである。この手の書物の場合、デル・リット監修のフォリオ版『イタリア絵画史』のように、巻末に索引を付するのが理想だが、そうでない場合、同じ人名、書名の繰り返しや、同一の主題についての言及箇所を知るために、本書のような詳細な注が役立つ。たとえば、美と恋愛とが互いに生命を与え合うことを論じた箇所の注(Livre I, Chapitre XIV, p.85、注 70)を見れば、同様のテーマが第一巻、第二巻、断章とくり返されるさまを知ることができる。所変われば恋愛も変わる、という相対主義的な思考についても、Livre I の注 161 (Chapitre XXVIII, p.120) によって、テキスト内部の参照関係が明らかになる。

同様に『恋愛論』と、それ以前と以後の著作との関連がこと細かに指摘されているのもありがたい。『恋愛論』と『赤と黒』、『リュシヤン・ルーヴェン』など後年の小説群との関連性は、基本情報の部類に入るだろうか。『恋愛論』出版直後に記された読書メモからは、本文でも垣間見えていた、スタンダールのトルバドゥールの詩作品そのものへの関心の薄さがより明確になる(Livre II, Chapitre LI, p.206、注 120。スタンダールの関心はむしろ当時の風俗のほうに向けられていた)。また、恋愛の七段階の3段階目にあたる「希望が生まれる」という項目に付された注(Livre I, Chapitre III, p.67、注 17)では、青年期(1804年6月)の読書メモが引かれている。ホップズの『人間の本性について』(*De la nature humaine*)第9章から取ったと思しき「恋は希望なくしては生まれない」という一文からは、ホップズが情報源のひとつであったという新たな可能性が浮上してくる。

巻末の付録(Annexes)にはガルニエ版、ビブリオフィル版にならい、スタンダール自身が作品の趣旨を語る「ほめそやし対話」(Puff-dialogue on love)(1822年執筆)、

「ほめそやし論文」(Puff-article) (1826年執筆)、*Paris Monthly Review* に載せた自作批評(1822年10月)が収められている。特筆すべきは、『恋愛論』出版当時に各誌に出た書評がまとめて収録されていることである。梗概をまとめただけの書評、「意味不明」、「独創性ゼロ」といった手厳しい書評が目立つが、なかには非常に公平で好意的な書評もあったことに驚かされる。たとえば1822年9月28日付の *Journal de Paris* 掲載の書評の評者、Béranger Labaume (« B.L. ») なる人物は、「リジオの手記」という設定が虚構であることもお見通しなら、記述が散漫で矛盾が多く、不明な人名が多すぎるといった欠陥もふまえたうえで、「結晶作用」の概念をはじめとする発想の独創性や、文体の自然さを高く評価している。スタンダールをよく知る人物の手になるものではないかと察せられるが、酷評に悩まされていたスタンダールが当時これを読んだら、どれほど救われた気持ちになっただろうか。Annexes 末尾には1834年に、セナンクールの『恋愛論』(*De l'amour*, 1806) 第4版の出版を受けて *Le Temps* 紙に掲載された書評の抜粋もあり、ここではスタンダールの『恋愛論』との比較が試みられ、最終的な軍配はスタンダールの側に上がっている。二人の作家の読み比べという意味でも興味深い資料といえる。

以上のように、本書はプレイヤッド新版の校訂作業にかかわり、スタンダールという作家を知り尽くした壮年の研究者の手になる、あらゆる意味において充実した、隙のない版であるといえよう。今後、もっとも参照される校訂版になることはまちがいない。

【コロック報告】

上杉 誠

最新の二つのコロックについてご報告いたします。両者ともに、各発表は論文としてすぐに文章化される予定ということですので、ここでは網羅的になることは目指さず、会場の様子と質疑応答などを中心に、個人的な気になった事柄のみの報告といたします。

『スタンダールは動く』 « Stendhal en mouvement »

2015年12月10日11日

クリスマス休暇にはいる直前の週末、二日間に渡って合計14の発表が行われた。論文として2016年秋『スタンダール年報』誌15号に掲載が予定されている他、会場となった財団のホームページ上では発表の映像が保存、公開されている<https://www.singer-polignac.org/fr/missions/lettres-et-arts/colloques/1259-stendhal-en-mouvement>。その会場というのは、トロカデロからパッシー墓地の脇をすすんだ通り沿いの邸宅街の一角に位置するシンガー＝ポリニャック財団(Fondation Singer-Polignac)、20世紀初頭の芸術家のメセナとして知られるポリニャック公夫人ウィナレッタ・シンガーの居宅であったという。大サロンにぬける部屋には、コレット、ラヴェル、フォーレ、ストラヴィンスキー、ファリャなどの作曲家の自筆の手紙を収めた陳列台が並んでおり、天井に描かれた青空と雲のもとシャンデリアが、金色と深緑で統一された壁と椅子を照らしている。財団のスタッフが照明、マイク、さらにはコーヒーと立食ビュフェまで完璧に取り仕切っており、通常の大学で開かれるコロックとは全く違う、貴族的といってよい舞台は、スタンダールの世界と決して不調和ではないだろう。

スタロバンスキーの著作『モンテーニュは動く』を直接参照する題がつけられた今回のコロックでは、旅行記、音楽論、小説、『恋愛論』、自伝などあらゆるジャンルの作品を対象に、テキスト内部、あるいは外部との関係に見られるさまざまな「運動(mobilité)」を読み取ることが試みられた。最初のセクションは物理的な移動を伴う、旅行記に関する発表が集められ、主に『ある旅行者の手記』が参照された(イタリア旅行記についてはほとんど言及がないのは不思議に思われた)。そんな中、アンセル氏の用いた「気密性(étanchéité)」という語が喚起した議論が印象に残った。その言葉の意味はというと、オリエントへ旅行したシャトーブリヤンなどとは違い、大の旅行家とはいえその地理的範囲がヨーロッパ内に限られていたスタンダールにとって、興味の対象は自らが理解できる自らに似ている人間に限られていたという旨なのであるが、11月のパリでの大規模テロの記憶が薄れていなかった時期、政治的に正しくない言葉を用いることへの疑義が提起された。かつてデルリット氏が『スタンダール研究』に寄せた序文において、スタンダールは異国趣味とはまったく無縁であった旨を強調していたのと同じことを指しているには違いなく、現在の「正しさ」から過去の作家を判断することの愚は言うまでもないのだが、ヨーロッパの外部からスタンダールを読んでいる者にとって、作家のそのような人間観は今一度の考察に

値するように思われた。

続いて、音楽をめぐる発表からは、音楽が今回の主題「運動」にふさわしい分野であることが説得的に感じられた。二日目は、未完成の著作や読書ノートにも共通の執筆（エクリチュール）をめぐる不動性を論じる発表が主に集められた。従来 *Journal littéraire* などに収められていた青年期のノートを新しく編集しなおした現在進行中の校訂版が論じられたほか、ブルドネ氏とベルスゴル氏はそれぞれ新しい版を校訂した『恋愛論』と『ブリュラール』について発表し、最後に、ディアス氏が序文などを通して作家の自己像を読み取る発表でクロックをまとめ上げた。批評校訂版の作成をめぐっては、編者にしか分からない悩みがベルティエ氏から告げられた。自筆原稿の句読点（punctuation）をそのまま反映させることは、出版社が許さないため、デルリットの版でしばしばみられた句読点をめぐる不必要な介入が新プレイヤード版においてたとえ正されたとしても、編者が完全に満足する版はなかなか実現しないことが示唆された。

「運動」という主題によってスタンダールの全貌とは言わずともできる限り多くの側面を読み取るという今回のクロックの目論見の通り、発表の主題は多岐にわたり、全体として作家の統一的な像と言うよりもその多様性、多く旅をし、多様なジャンルの著作を試みた作家スタンダールの多面性に焦点が当てられた。発表だけでなく各セクションの司会を担当した、ベルティエ氏、ディディエ氏、ラビア氏による質疑応答の運び回しも印象に残った。専門的な知識に裏打ちされた多様な視点が提示されながらも、会話の心地よさが維持される空間は稀有なもののように思われた。

『スタンダール：幸福とメランコリー』

« Stendhal : bonheur et mélancolie »

2016年3月18日19日

空気はまだまだ冷たいものの日差しが心地よい頃合い、復活祭の一週間前の週末に『H.B.』誌と「今日のスタンダール」学会の主催でソルボンヌにて開かれたクロックでは、二日間に渡り16の発表が行われた。各発表は、次号『H.B.』誌21号に掲載される予定という。毎年ほぼ決まった時期に行われるクロックのためか、発表者には固定メンバーが多くみられるといい、フランス語を母語としない研究者の割合が高いようにも見受けられた。ここ数年の主題を挙げると、2015年2月の「短い語り (le récit bref)」、2014年2月の「サスペンス (le suspense)」、2013年3月「女性のエロ

イスム (l'héroïsme au féminin)」、2012年3月の「エネルギー (l'énergie)」と多岐にわたる。今回の主題について、主催のアールス氏はコロックの冒頭で、スタンダールの代名詞といえる言葉「幸福の追求」を挙げながら、その「幸福」に含まれる「メランコリー」の「分量」をさまざまなケースで図りたい、との意図を説明した。

小説作品が多く参照されるのはコロックの主題に適って当然であり、『アルマンス』のアンディイでの散歩、『ルーヴェン』でのバチルド、『パルムの僧院』のファルネーゼ塔のクレリアとファブリス、コモ湖で夢にふけるファブリス、『ヴァニーナ』を中心としたヌヴェル (短編小説) 等が参照された。中でも、制服 (むしろ軍服と訳した方がよいかもしい) をめぐる総括的な発表や、『赤と黒』における幸福とメランコリーとその関連語の頻出度を数えだした結果をもとにした発表が印象に残った。

幸福とメランコリーの二語に関して、メランコリーについては『イタリア絵画史』で参照されるカバニスの「気質論」における定義が繰り返し参照されたものの、幸福、それも「下賤な幸福 (bonheur vulgaire)」と区別される幸福の定義は直接的にはなかなか示されなかったという印象があった。そのなかで、『ラミエル』の専門家のリンケス氏が、デステュット・ド・トラシーの「恋愛について」(『イデオロギー要綱』所収) を参照しながら、ラミエルにとっての幸福を、愛やメランコリーとは別の「自由」に由来するものであると論じた。また、幸福とメランコリーという主題において音楽の主題が導き出されるのは自然であり (一方、絵画にまつわる言及はほとんどなかった)、ともに音楽論の専門家であるエスキエ氏とディディエ氏の発表があった。

『モーツァルト伝』と『ロッシニ伝』のモーツァルトに割かれた章を主な対象としたディディエ氏は、シャトーブリアンやスタール夫人にとってのメランコリーと対比させながら、モデルヌな感情としてのスタンダールのメランコリーを論じた。コロックは、クルゼ氏の変わらぬエネルギーに満ちた発表で幕を閉じた。

フランスでの最新の研究動向について以上の二つのコロックを通して総括することは不可能であるものの、発表者の顔ぶれを見るだけでも、スタンダール研究が着実に次世代に継承されていることが分かる。ベルティエ、ディディエ、クルゼの三大家の発表を聞けるなか、新プレイヤード版やその他、新しい版に携わった研究者が活躍し、博士論文準備中の若手の参加も珍しくない。研究対象として小説に限らないあらゆるジャンルのテキストが参照されたのは、どちらのコロックも主題がジャンルをまたぐものだったことが当然の要因であろうが、小説作品をめぐる新プレイヤード版だけでなく、他の作品についても新しい版が次々と完成されていること

も関係するのかもしれない（実現はまだ先のようなのだが、『イタリア絵画史』の新しい版が準備中との話も耳に挟んだ）。残念ながら参加できなかったものの、2016年3月17日18日に、グルノーブル大学にて開かれたシンポジウム「歴史家スタンダール」« Stendhal historien »が、これまで余り注目されてこなかった側面を強調しているように、まだまだ新たな視点の提示も可能なようである。一方、それぞれの研究者のもつ手法と語り口が研究の多様性を生み出すことも強調してよいように思われた。たとえば、書簡を対象とした研究で知られるディアス氏が12月のコロックでは序文などに注目しながら作家の自己像を分析するなど、個々の研究者の一貫した方法と問題意識が作家像に深みを与えるようである。

そんな中、12月のシンポジウムでお目にかかったデルリット時代をしる高齢と見受けられる参加者が、昔とは雰囲気が変わったことを残念がっていたことは印象的だった。12月のシンポジウムはあまりに universitaire であるとの感想を伺ったのだが、実証的な新しい事実の発見や作品に具体的に寄り添う形の発表というよりも、抽象度を上げた論理、語彙を用いて幅広く総括的に論じるものが多く、それが大学の環境から離れた方には違和感をもって感じられたということの意味しているのかと勝手に想像した。デルリット時代の「友の会」にも日本人の研究者が訪れていた旨を懐かし気に語られるのを聞くに、連綿と続く日本人研究者によるスタンダール研究の厚みが思い起こされ、その片隅にこうして加わっていただけることに感謝しながら報告を終わりとする。

また、パリ市歴史図書館で行われている「スタンダール友の会」の毎月の例会は、図書館の改装と本年度いっぱい学芸員の方が退職することに伴い、会場を変更するという。日の暮れた時刻にマレの石畳を抜け、暗がりに浮かび上がる独特の梁の模様の下、名立たるスタンダリアンが集まるという、非現実な感覚を楽しみにしていたものにとって残念な知らせである。

【会員活動報告】

岩本 和子

- ・ « Pauline était-elle heureuse ? L'éducation de la femme idéale selon Stendhal », *L'Année stendhalienne* n° 14, Honoré Champion, novembre 2015, « Stendhal au Japon II : Hommage à Shoichiro Suzuki », études réunies par Keiko SUGIMOTO, p.73-95.

上杉 誠

- ・ « La question de l'honneur dans la *Vie de Henry Brulard* : un aspect de l'«espagnolisme stendhalien» », *L'Année stendhalienne* n° 14, *op. cit.*, p.55-71.

片岡 大右

- ・ « Chateaubriand, disciple infidèle de Pascal », *Revue d'histoire littéraire de la France*, Paris, Presses universitaires de France, n° 3, juillet-septembre 2015, pp. 531-542.
- ・ 「1950 年前後の加藤周一 — ロマン主義的風土の探究と日本的近代の展望（上）」, 『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第 61 号, 日吉紀要刊行委員会, 2015 年 10 月, 71～99 頁.
- ・ 共著: 『〈生表象〉の近代 — 自伝・フィクション・学知』森本淳生編, 水声社, 2015 年 10 月 (「表象の失調に注がれる眼差し — スタンダールと鏡の経験」73～93 頁) .
- ・ 共著: 『共和国か宗教か、それとも — 十九世紀フランスの光と闇』宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編, 白水社, 2015 年 12 月 (「近代世界という荒野へ — シャトーブリアンと宗教」61～98 頁) .

小林 亜美

- ・ « Le pouvoir des références picturales dans *Lucien Leuwen* et *Le Chasseur vert* », *L'Année stendhalienne* n° 14, *op. cit.*, p.45-54.
- ・ 研究ノート: 「スタンダール『1824年のサロン』—フランソワ・ジェラルドを中心に—」, 『人文論叢』第 64 号, 京都女子大学人文学会, pp. 33-45, 2016 年 1 月.
- ・ 「スタンダールとシュネッツ — 『1824年のサロン』における「偉大なる画家」—」, 『EBOK』第 28 号, 神戸大学仏語仏文学研究会, 2016 年 3 月.

下川 茂

- ・ « Du sadisme stendhalien dans *Armance* », *L'Année stendhalienne* n° 14, *op. cit.*, p.29-44.

杉本 圭子

・ « Eloge de l'inachèvement : réflexions sur les «Fragments divers» », *L'Année stendhalienne* n° 14, *op. cit.*, p.13-28.

・ 翻訳 : スタンダール『恋愛論』 岩波文庫, 上・下巻, 2015年12月・2016年2月.

高木 信宏

・ « Petite remarque sur l'histoire du stendhalisme : Paul Léautaud et Adolphe Paupe », *L'Année stendhalienne* n° 14, *op. cit.*, p.97-110.

田戸 カンナ

・ 「ソフィー・ドワンの小説作品における白人女性の役割——黒人をめぐって——」, 第9回日仏女性研究学会会員研究発表会, 2015年7月18日, 日仏会館.

【編集後記】

今号から会報を担当させて頂くことになりました小林亜美です。不慣れ故の不手際も多々あったかと存じますが、みなさまのご協力を頂きまして無事春の研究会にあわせて会報26号をお届けすることができ、一安心しています。引き続きどうぞよろしくお願い致します。

研究発表要旨に加えて書評とコロック報告もお寄せ頂いて、今号も内容豊かなものになりました。また、活動報告も実に多数かつ多彩で、スタンダール研究の幅広さと奥深さに改めて驚きを禁じ得ません。・・・と書くと何か余所事のようなのですが、自分自身もその末席に身を置いているという事実にも、改めて驚いている次第です。

(小林 亜美)